

日本都市社会学会ニュース

NO. 99 (2014. 11. 30)

発行：日本都市社会学会

事務局：〒700-8516 岡山市北区伊福町2-16-9

ノートルダム清心女子大学文学部現代社会学科 二階堂裕子研究室内

Tel : 086-252-3329 / Fax : 086-252-5145

e-mail : usocio@urbansocio.sakura.ne.jp

URL : <http://urbansocio.sakura.ne.jp/>

(振替口座 : 00140-4-703976)

第32回大会の報告

松橋 達矢 (日本大学)

日本都市社会学会第32回大会は、9月11日(木)・12日(金)の2日間、専修大学生田キャンパスにて開催され、平日にもかかわらず最終的な参加者は97名(内非会員10名、韓国地域社会学会より7名)を数えた。

1日目に自由報告部会が2部会、テーマ部会(「東日本大震災と都市社会学」)が1部会、2日目に自由報告部会1部会と日韓ジョイント・セッション(「グローバル化のなかの都市・農村関係——衰退地域の視点から」)、そしてシンポジウム(「都市中間層と居住空間の再編」)と、盛りだくさんの企画・内容のもとで開催された本年度の学会大会は、各部会において非常に熱のこもった議論が展開されていた。

ところで本年度は、議論の趨勢として3つの柱が存在していたように思う。

1つ目としては、2日目のジョイント・セッションも含め、グローバル・ナショナル・ローカルな諸力が相互浸透する場としての都市に照準化した報告が多かった点である。自由報告全11本のうち、2本が韓国の先生方ということ差し引いてもこの点は顕著であり、グローバルな影響と不可分な都市への想像力の重要性を再確認できた。

2つ目としては、発生から3年半が経過した東日本大震災や原発事故を反省的に捉え返す報告群が挙げられる。とりわけ、各々の立場からフィールドとのかかわりを維持し続ける中で知見を深めていく報告者三氏を迎えたテーマ部会は出色であり、今後の研究展開に強い期待感を抱いた。

3つ目としては、2日目のシンポジウムに代表される「階層と空間」の関係性をめぐる旧くて新しい論点である。近年の階層研究では、居住空間ごとの客観的な階層構造の差異が人々の意識の空間化をもたらすのみならず、価値意識がこうした空間化を強める方向にも弱める方向にも作用してきた点が明らかとされている。そうした知見を都市社会学の文脈に接合するのにあたっては、理論・操作概念間の距離の問題や「報復都市」論の「翻訳」可能性など、未だ乗り越えるべき課題は多い。個別の空間化のプロセスを丹念に描きつつ、なぜそうした動きが特定層の住む場所で特殊な形態をとって表出するのか。またそこで成立可能な共同とはいかなるもので、どのようなオルタナティブを提示していけるのか。フィールドとのかかわりの中で見出すべき課題となろう。

最後になりましたが、すばらしい環境で討議や懇談ができましたことを開催校の皆様方や事務局の皆様にご感謝いたします。

総会の記録

総会は、大会1日目の9月11日（木）、下記の次第にそって行われました。

1. 開会の辞（鯨坂学 常任理事）
2. 会長挨拶（谷富夫 会長）
3. 開催校挨拶（広田康生 会員）
4. 座長推挙（有末賢会員を選出）

5. 諸報告

- (1) 2013～2014年度理事会報告……二階堂裕子事務局担当理事より、2013～14年度の理事会に関する報告がありました。また、本大会1日目の参加者が67名であること、本学会会員数が280名（一般会員240名、学生会員37名、終身会員3名）であることが報告されました（9月10日現在）。
- (2) 2013～2014年度企画委員会報告……横田尚俊企画委員会委員長より、2013～2014年度の企画委員会活動について報告がありました。
- (3) 2013～2014年度編集委員会報告……稲月正編集委員会委員長より、年報32号の編集作業状況、バックナンバーのアップロード作業状況、年報33号の投稿募集について、それぞれ報告がありました。
- (4) 国際交流委員会報告……山本かほり国際交流委員会委員長の代理として、文貞實同委員会委員より、本大会における韓国地域社会学会との交流についての報告がありました。
- (5) 社会学系コンソーシアム担当報告……高木恒一理事より、社会学系コンソーシアム担当の活動について報告がありました。
- (6) 新入会員紹介……二階堂裕子事務局担当理事より、新入会員10名の紹介があり、全員拍手をもって承認されました。
- (7) その他……谷富夫会長より、追加資料「共同利用事業・共同研究公募要領」に基づき、大阪市立大学先端的都市研究拠点事業の概要が報告され、来年度に向けて、共同研究の希望者は事務局に問い合わせいただけるよう、情報提供がありました。

6. 第5回日本都市社会学若手奨励賞選考委員会報告

第5回日本都市社会学若手奨励賞選考委員長の松本康会員に代わり、渡戸一郎理事より、選考過程と選考結果、受賞作品と受賞理由に関する報告が行われました。受賞者と受賞作品は以下の4件です。

【著書】丸山里美『女性ホームレスとして生きる—貧困と排除の社会学』世界思想社、2013年

【論文】妻木進吾「貧困・社会的排除の地域的顕現—再不安定化する都市部落」『社会学評論』62(4)、2012年

三田知実「衣料デザインのグローバルな研究開発拠点としての都市細街路—東京都渋谷区神宮前における住宅街からの変容過程」『日本都市社会学年報』31号、2013年

山本崇記「都市下層における住民の主体形成の論理と構造—同和地区／スラムという分断にみる地域社会のリアリティ」『社会学評論』63(1)、2012年

7. 議事

- (1) 外国人会員の年会費の減額について……二階堂裕子事務局担当理事より、外国人会員の年会費の減額の議論についての経緯が説明されました。その上で、日本都市社会学会規約の改正案及び「外国人会員会費減額規則」が提案され、異議なく拍手により承認されました。また、外国人会員の入会金減額については事前の理事会で意見の一致に至らなかったため、継続審議とする旨が報告されました。
- (2) 2013年度決算および監査報告……二階堂裕子事務局担当理事より、2013年度決算が報告されました。また、公務欠席の大谷信介監事・武田尚子監事に代わり、鯨坂学常任理事より、会計処理が適正になされ2013年度決算に相違がないという監査結果の報告が行われ、異議なく拍手により承認されました。

(3) 2014年度予算……二階堂裕子事務局担当理事より、2014年度予算案が提案され、異議なく拍手により承認されました。

(4) 次年度大会について……谷富夫会長より、2015年度大会を静岡県立大学で開催する提案がなされ、拍手により承認されました。これを受けて、大会開催校の高畑幸会員による挨拶が行われました。なお、開催日は、9月12日(土)、13日(日)の予定です。

8. 閉会の辞 (二階堂裕子 事務局担当理事)

(事務局担当理事 二階堂裕子)

2013年度決算および2014年度予算

2013年度 決算報告(2013年4月1日～2014年7月31日)

収入				支出			
項目	予算	決算	備考	項目	予算	決算	備考
入会金	30,000	30,000	15名分	消耗品費	40,000	57,533	事務局封筒、文具等
学会費	1,705,000	2,545,284	一般243名・学生36名・終身3名	通信費	200,000	182,993	
広告収入	50,000	40,000		ニュース印刷費	150,000	80,640	第95号(450部)・96号(350部)・97号(350部)
雑収入	20,000	14,958	利息・複写権収入等	年報印刷費	500,000	420,000	第31号(400部)
年報販売	100,000	112,700	58冊分	大会開催費	200,000	200,000	第31回大会(熊本大学)、第32回大会(専修大学)
編集委員会残金	27,370	27,370	12年度分	役員・委員会費	350,000	55,000	役員・委員旅費補助含む
				事務局費	400,000	191,767	事務局員手当、アルバイト代等
				学会賞費	20,000	85,011	委員旅費補助含む
				企画委員会費	160,000	172,295	委員旅費補助・非会員旅費・非会員謝金含む
				編集委員会事務局費	50,000	25,274	
				国際交流費	100,000	70,938	
				震災関係特別委員会	100,000	0	
				社会学系コンソーシアム	10,000	20,000	
				名簿作成費	100,000	0	
				学会費返金	0	3,500	
繰越金	2,204,869	2,204,869		予備費	1,757,239	325,500	HPデザイン費、HP維持費
計	4,137,239	4,975,181			4,137,239	1,890,451	

次年度繰越金 3,084,730

2014年度 予算案(2014年8月1日～2015年7月31日)

収入			支出		
項目	予算	備考	項目	予算	備考
入会金	30,000	15人分	消耗品費	40,000	文具、封筒等
学会費	1,205,000	一般170名, 学生25名	通信費	200,000	
広告収入	40,000		ニュース印刷費	100,000	350部×2回、400部×1回
雑収入	20,000	利息・複写権収入等	年報印刷費	500,000	第32号(2014年号)400部
年報販売	100,000		大会開催費	100,000	第33回大会
編集委員会残金	24,726	13年度分	役員・委員会費	350,000	役員・委員の旅費補助を含む
			事務局費	300,000	事務局員手当、アルバイト代、事務局員交通費及び年報販売業務費を含む
			学会賞費	20,000	賞状等
			企画委員会費	160,000	非会員の旅費・謝礼を含む
			編集委員会事務局費	50,000	編集関係通信費、事務局員手当を含む
			国際交流費	100,000	
			震災関係特別委員会	100,000	
			社会学系コンソーシアム会費	10,000	
			名簿作成費	100,000	
繰越金	3,084,730		予備費	2,374,456	
計	4,504,456			4,504,456	

第5回 日本都市社会学会若手奨励賞 受賞作品の紹介と選考理由

2014年度学会賞選考委員会（以下、委員会）は、学会規約第2条第3項の定めるところにより、今年度は若手奨励賞の選考を行い、9月11日の第32回大会において4名の会員に授与した。以下、選考経過、選考結果、選考理由について報告する。

1. 選考経過

委員会では、若手奨励賞内規第6条に従い、(1)会員の自薦・他薦、(2)推薦委員による推薦、(3)学会事務局が会員を対象に行う文献調査によって作成された著作一覧をもとに、2012年1月から2013年12月までに公刊された著書5件、論文21件、共著の分担執筆4件、計30件を審査の対象とした。2月23日、6月29日、8月10日の3回の委員会における審議の結果、著書1件、論文3件、計4件を受賞作とすることに決定した。

2. 選考結果

【著書（単著）】

丸山里美『女性ホームレスとして生きる——貧困と排除の社会学』世界思想社、2013年3月。

【論文（いずれも単著）】

妻木進吾「貧困・社会的排除の地域的顕現——再不安定化する都市部落」『社会学評論』62(4)、2012年3月。

三田知実「衣料デザインのグローバルな研究開発拠点としての都市細街路——東京都渋谷区神宮前における住宅街からの変容過程」『日本都市社会学会年報』31号、2013年9月。

山本崇記「都市下層における住民の主体形成の論理と構造——同和地区／スラムという分断にみる地域社会のリアリティ」『社会学評論』63(1)、2012年6月。

3. 選考理由

◇ 丸山里美『女性ホームレスとして生きる——貧困と排除の社会学』世界思想社、2013年3月。

本書は、これまでの男性ホームレスを対象としてきたホームレス研究をジェンダー論的視点から批判的に検討し、新たなホームレス研究の枠組みを提示するとともに、丹念な参与観察によって、周囲の人々の関係のなかで野宿と福祉施設の間を揺れ動く女性ホームレスの生活世界を描き出した研究である。ここで示されているのは、男性ホームレス研究が「あらかじめ自立した主体を想定し、それを前提に野宿生活のなかに変革の意志や抵抗を見出そう」としてきたことへの批判であり、これにかわり、他者との関係において生き方を選択していく（女性）ホームレスの生活実践をつぶさに観察することによって、さまざまな揺らぎの中で自分の未来を構想し追求していこうとする「主体」のありようを理解するとともに、その個々人の営みを尊重するための制度を模索していくことの重要性である。

このような研究成果をふまえ、本書を、ホームレス研究の中に新たな研究方法と分野を切り開いた研究と評価し、日本都市社会学会若手奨励賞を授与するにふさわしいものと判断した。

◇ 妻木進吾「貧困・社会的排除の地域的顕現——再不安定化する都市部落」『社会学評論』62(4)、2012年3月。

本論文は、米国大都市インナーシティで貧困の集中効果による深化を明らかにしたW. ウィルソンの議論を踏まえ、さまざまな対策事業が終了した同和地区大阪市A地区を事例に、若年層の雇用が再不安定化し、高学歴の安定就業層が転出し、他方で新たに不安定層が流入している実態を、これを規定している諸要因の中に明らかにしている。論旨の展開が明快で、長年にわたるフィールドワークと調査票調査からのデータ、既存研究の知見を手堅くまとめた論考である。地区の人口推移をコーホート別にとる着目が一步踏み込んだ実証的な分析を可能にしている点を高く評価でき、学会の若手奨励賞にふさわしい優れた研究の成果であると認める。今後この地区での貧困化の深化が、「フローの生活」やブルーカラーを指向するエートスに根ざ

した地区固有の文化的要因の作用に因るものとなるのか、あるいは、新たな貧困地区に再編されてゆくのか、研究をさらに深められることを期待したい。

◇ 三田知実「衣料デザインのグローバルな研究開発拠点としての都市細街路——東京都渋谷区神宮前における住宅街からの変容過程」『日本都市社会学会年報』31号、2013年9月。

本論文は、グローバル都市論を参照基準としながら、都市社会学における近年の文化生産研究の成果を踏まえて、衣料デザイナーの立地行動を軸に大都市都心に近い住宅地の変容過程の実証を試みたものである。具体的には、1980年代以降の東京都渋谷区神宮前における住宅地（細街路）の変容を、衣料デザインの研究開発拠点化としてとらえるとともに、服飾産業のグローバルな分業の展開におけるこの地域の位置づけを明らかにした点で、本学会の若手奨励賞に十分値する。これらの小規模衣料デザイン企業は、グローバルな大量生産志向の大資本デザイン企業を顧客とした生産者サービスの役割を果たす一方で、象徴的資源（作品に対する高い評価）の獲得を目的とする純粋生産を追求するがゆえに、低所得に留まるとされているが、この階層性の問題の掘り下げは不足しており、今後、研究のさらなる発展が期待される。

◇ 山本崇記「都市下層における住民の主体形成の論理と構造——同和地区／スラムという分断にみる地域社会のリアリティ」『社会学評論』249号、2012年6月。

本論文は、京都市南区において繰り広げられた約40年間の住民運動を詳細に分析した作品である。この地域は、同和地区と在日朝鮮人集住地域で構成されており、それらは重なり合っている。本論文は、この地域の運動過程を4つの時期に分けたうえで、そのリーダーたちの役割の変遷と組織間の連携を腑分けしている。結論として、①部落差別と在日朝鮮人差別に通底する「住民性」に立脚した反差別運動だったこと、②その運動体は指向性の相違する諸団体で構成され複層化していたこと、③リーダーたちが時期によって異なる組織に関わることで緊密性が保たれたこと、④行政との関わり方も多様であり、それは施策の開始・停滞・再開に関わったこと、⑤1970年代以降、かたちを変えつつも地域社会の自律性が保持されてきたこと、が明らかにされる。著者は、これを「都市下層における住民の主体形成」と呼んでいる。本論文は、運動が行政対住民という単純な対立図式で語れない豊饒さをもつことを、入念かつ緻密な分析によって明らかにした点で、学会として賞を授与するにふさわしい優れた都市社会学研究である。

4. 学会賞選考委員の構成

2013—2014年度学会賞選考委員は、松本康（選考委員長）、今野裕昭、奥田憲昭、黒田由彦、中筋直哉、西村雄郎、早川洋行、安河内恵子、渡戸一郎、和田清美であった。

（学会賞担当理事 渡戸一郎）

会員の皆さまへのお知らせ

理事会報告

2014年度第1回理事会は、10月19日（日）名古屋大学東山キャンパスにて開催されました。

①学会賞選考委員および推薦委員の選出、②学会費の会期、③外国人会員の入会金の減額、④海外データベースへの参加、⑤著作権ポリシー、⑥学会ニュースの発行、⑦第33回大会の開催、⑧入退会の承認について、それぞれ審議しました。

（事務局担当理事 二階堂裕子）

企画委員会報告

9月12日の第32回大会終了後、本年度の第1回企画委員会を開催し、大会の総括と反省を行いました。その後、10月19日に第2回を開催し、次回（第33回）大会の企画案について協議しました。

シンポジウムについては、第32回大会テーマ部会「東日本大震災と都市社会学」の成果を受けて、震災関係のテーマを設定することにしました。また、テーマ部会の新たなテーマ設定について、自由に意見を交換しました。

そのほか、次回大会ではテーマ報告部会を復活させ、会員から報告者を募ってはどうかという提案があり、その方向で企画を詰めていくことになりました。

各委員の役割分担を決定しましたので、今後、それぞれの担当委員を中心に企画案を具体化していく予定です。詳しい検討の状況については、次回学会ニュースにてお知らせいたします。

(企画委員会委員長 横田尚俊)

国際交流委員会報告

今回の専修大学で行われた大会では、韓国地域社会学会から7名の先生方をお迎えしました。今大会では、本格的な学術交流の第一歩として、大会に日韓ジョイントセッションを企画。共通のテーマで日韓それぞれの研究者が報告をすることを試みました。

プログラムは2日目、9月12日の午前中に行われ、共通テーマを「グローバル化のなかの都市・農村関係——衰退地域の視点から」とし、韓国からは、「都市再生の代替戦略としての社会的経済の再建——旧炭鉱都市を中心に」というタイトルで、キムウォンドン先生(江原大学)パクチュンシク先生(翰林大学)、キムソンク先生(釜山大学)が発表、日本からは、山下祐介会員(首都大学東京)が「日本の過疎問題の生成と展開——選択と集中から多様なものの共生へ」というテーマで報告をしました。その後、高野和良会員(九州大学)と加来和典会員(下関市立大学)によるコメント、そして、フロアも交えての活発な議論が展開されました。今回の日韓ジョイントセッションは通訳を用意して、お互いの母語で報告し合うことも一つの試みでした。時間の制限が多くなる一方で、やはり、母語による討論で議論を深めることができたとも考えています。

さらに、同日の同時間帯に行われた自由報告部会においても、地域社会学会の4名の先生が2本の報告を行い、英語と日本語をまじえた活発な質疑や議論が行われました。

今後、韓国地域社会学会との学術交流の質と量をいかに高めていくか、会員のみなさまからの活発なご議論をお願いします。

(国際交流委員会委員長 山本かほり)

第9回 日本都市社会学会賞(磯村記念賞) 候補文献の調査および推薦に関するお願い

日本都市社会学会賞(磯村記念賞)内規にもとづき、文献調査を行います。あわせて自薦・他薦の応募を受け付けます。多くの方々からの応募をお待ちしています。

受賞資格者および対象：原則として、日本都市社会学会個人会員の刊行された著書ですが、編著・共著も対象にすることができます。

対象著書：今回、対象となるのは、2013年1月1日から2014年12月末日までの2年間に刊行された、本学会会員の研究業績です。

選考基準：以下の通りです(学会賞内規6)。

次の1つ以上の要件に該当する研究業績を受賞の対象として選考する。

- (1) 都市社会学に関する独創的な研究であること。
- (2) わが国都市社会学研究において画期的な意義を有するものであること。
- (3) 都市社会学研究の新しい分野において、とくに優秀な業績と認められるものであること。
- (4) 永年にわたる蓄積の成果が、わが国都市社会学研究に大きな貢献をもたらしているものであること。
- (5) 国際的に高く評価されているものであること。

(6) その他、都市社会学研究の進歩発展のため意義があると認められるものであること。

文献調査：上記の基準を満たす著書を発表した会員は、同封の調査用紙に所定事項を記入の上、2015年1月末日までに学会事務局までお送り下さい。この情報は、選考対象の母集団を構成するもので、条件を満たすすべての研究業績についてご記入下さい。

自薦・他薦：上記の基準を満たす著書のうち、同賞にふさわしい「都市社会学に関する学術の進歩発展に貢献したと認められる研究業績」をご推薦下さい。会員であれば、だれでも推薦者となることができます。自薦も歓迎します。同封の調査用紙の自薦・他薦欄に所定事項をご記入の上、2015年1月末日までに学会事務局までお送り下さい。

宛先／問い合わせ先：学会事務局の住所は、本ニュース1頁目にあります。予算の関係上、送料は自己負担をお願いいたします。また、この件についてのお問い合わせは、学会事務局までe-mailでお願いいたします。

選考対象のリスト作成は、会員自身による文献調査報告や自薦がまずは基本となります。該当される方は、ぜひとも積極的に対応下さい。なお、学会賞用の調査用紙・自薦他薦用紙は学会WEBサイトからダウンロードできますので、ご活用ください。

(日本都市社会学会賞選考委員会委員長 渡戸一郎)

「特殊飲食店女子組合員調査(いわゆる「磯村調査データ」)」の公開について

本ニュース97号でお知らせした「特殊飲食店女子組合員調査(いわゆる「磯村調査データ」)」ですが、立教大学社会調査データアーカイブ(RUDA)で公開を始めました。当初予定より大幅に遅くなりましたことをお詫び申し上げます。

データの利用に際しては利用登録が必要となります。詳細は以下のホームページをご覧ください。

<https://ruda.rikkyo.ac.jp/>

(理事／立教大学 高木恒一)

奥田道大先生 追悼文

2014年3月14日、奥田道大先生が逝去された。享年81歳。奥田先生が、戦後の日本都市社会学の第一人者であり、つねに学会をリードし、都市研究のフロンティアを開拓されてきたことはだれしも認めるところであろう。

1960年代初頭の都市化論争に際しては、早くも郊外化の重要性を指摘し、やがて郊外において住民運動が頻発するようになると、その意義をいち早くとらえてそこにコミュニティ形成の契機を読み取り、奥田モデルとして知られる「コミュニティ・モデル」を提起されたことは、日本都市社会学に残る不朽の業績となった。

その後、先生の関心は、ふたたび中心都市に向かいはじめた。米国から都市衰退が伝えられるなか、都心部のコミュニティの動向が気がかりであったのであろう。先生の都市社会学の出発点は、1950年代、旧中間層主体の地域住民組織の研究であった。1980年代に先生が東京の都心で遭遇したのは、思いもよらない事態であった。バブル経済の影響をうけ、あの盤石にみえた都心部の住民組織が、土地投機によって根こそぎ消滅するという事態である。1980年代の都心型コミュニティの構想は「都市の文脈」に直面して、郊外型のコミュニティとは質的に異なる壮絶な戦いの様相を呈していた。

しかし、この過程で、奥田先生の目にとまったのは、インナーエリアにおける外国人居住者の増加であった。豊島区日出町の調査を皮切りに、90年代以降、池袋・新宿など東京のインナーエリアをフィールドとして、エスニシティ研究のフロンティアを切り開いた。米国の都市研究の動向につねに注意を払っていた先生が、「シカゴ・スタイル」を強調するようになったのも、このころからである。若き日にブランダイスでエ

ヴェレット・ヒューズから受け継いだ遺伝子が発現したかのように、「ようやく日本でもエスニシティの研究ができるようになった」とおっしゃっていたことが思い出される。

このように先生は、つねに都市の新しい動きに鋭敏で、新たな研究領域を切り開いていく開拓者であった。本学会の設立発起人のひとりであり、学会発展の原動力でありつづけ、1991年から95年まで2期にわたり本学会会長を務められた。制度的なことを好まない先生からは「余計なことを…」とお叱りを受けそうだが、この最小限の言及だけはどうかお許しいただきたい。

先生の訃報に接し、寂寥感を禁じ得ないでいる。これまでの温かいご指導にあらためて感謝申し上げるとともに、謹んでご冥福をお祈りいたします。合掌。

(立教大学 松本 康)

会員異動

新入会員 (2014年10月19日理事会承認)

<関東地区> 小川豊武 (東京大学大学院)

(事務局担当理事 二階堂裕子)

学会事務局より

- ◆ 第32回大会を、無事開催することができました。開催校の広田康生会員、今野裕昭会員、藤原法子会員をはじめとする関係者の皆さまへ、事務局から厚く御礼申し上げます。
- ◆ 第32回大会に参加された会員の皆さまには、「学会ニュース」、「学会員名簿」、学会賞候補文献の推薦用紙、文献調査用紙を同封いたしました。
- ◆ 第32回大会に参加されなかった会員の皆さまで、2013年度までの会費を納入された方には、『日本都市社会学会年報32号』と「学会ニュース」「学会員名簿」、学会賞候補文献の推薦用紙、文献調査用紙を同封いたしました。なお、2014年度の年会費を未納の方は、同封の「振込用紙」にてお振込くださいませよう、よろしく願いいたします。
- ◆ 第32回大会に参加されなかった会員の皆さまで、2013年度までの会費に未納分がある方には、「学会ニュース」、「学会員名簿」、学会賞候補文献の推薦用紙、文献調査用紙を同封し、『日本都市社会学会年報32号』を同封しておりません。未納分をお振込いただき次第、お支払いいただいた年度の翌年発行の年報をお送りさせていただきますので、同封の「振込用紙」にてお振込くださいませよう、よろしく願いいたします。
- ◆ 2014年9月11日(木)に行われた総会にて、「外国籍会員に対しては、『外国人会員会費減額規則』にもとづき、当人の申告によって、会費を減額することができる」ことが決定いたしました。詳しくは、学会HPに掲載された「日本都市社会学会規約」および「外国人会員会費減額規則」をご参照いただき、申請書をダウンロードして必要事項をご記入の上、学会事務局へお送りください。
- ◆ 第33回大会を、2015年9月12日(土)・13日(日)に、静岡県立大学にて開催いたします。詳細につきましては、次号の学会ニュース、および学会HPにてお知らせする予定です。

(事務局担当理事 二階堂裕子)